
逆転ボーイ アンド ガール

水瀬律那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転ボーイ アンド ガール

【Nコード】

N9884B

【作者名】

水瀬律那

【あらすじ】

あるところに、とても美しいお姫様ととても人気のある王子様がいました。しかし、お姫様は男勝りで王子様は女の子のようだったのです……。そんな二人を高校生の二人に置き換えた学園物語。

序章

あるところに、とても美しいお姫様がいました。
顔立ちがよく、それはそれは麗しいお姫様でした。

そのお姫様は恥ずかしがりやなのか、滅多にお城の外へ出ることはありませんでした。

それどころか、人と会うのも拒否してました。

お城の外に出るのは、何か大きなイベントがあるときだけ。

庶民の間では、イベント以外でお姫様を見たら

何かいいことがある、という噂まで語られるほどでした。

そんな美しいお姫様がいる国の、隣の国。

そこには、とてもかつこいい王子様がいました。

顔は女の子みたいで、それに華奢でしたが

身体能力はとても高く、庶民にとっても人気がある王子様でした。

そんな王子様は、隣の国のお姫様のことが好きでした。

しかし、お姫様は人と会うのを拒んでしまうので

なかなか話す機会がなく、王子様は悩んでいました。

そんなとき、王子様の耳に飛び込んできたのは

隣の国のお姫様が、悪者にさらわれたと言う

衝撃的なニュースでした。

しかし、同時にそれはチャンスでもありました。

お姫様を助け出せば、接するチャンスが増えるかもしれないのです。

そこで、王子様は決心しました。

武器を持ち、持ち前の身体能力で

立ちは大なる魔物をどんどん倒して、お姫様をさらった魔物のもとへと、着実に近づいていきました。

そして、お姫様をさらった、ボスとも言える

魔物のもとへ、王子様は辿り着きました。

大きな、魔物の館の最上階。そこに、魔物はいます。

王子様は、もうボロボロです。

しかし、お姫様を助けるために、王子様は立ち上がります。

大きな扉を勢いよく開けます。

「お姫様！！助けに来ました！！」

大声で叫びながら、急いで中に入ります。

しかし、そこに魔物の姿はありません。

よく見てみると、魔物は床に倒れているではありませんか。

そして、その前にはお姫様が仁王立ちで立っていました。

王子様は呆氣にとられます。事情を聞こうと、お姫様へと近づきます。

「あ・・・あの・・・お姫様、これは一体・・・？」

お姫様は王子様に気がついて、振り返ります。

「え？ああ、私が倒したの。結構弱かったわよ」

お姫様の綺麗なドレスは、膝丈まで引きちぎられ
その下にはジャージが見えています。

「あー疲れた・・・あ。助けに来てくれたの？
なら序でになんか奢^{おご}つてよ」

王子様は何が何だか分からずに、ただボーっとしていました。

「ドレス邪魔。脱いじゃおう」

すっかりジャージ姿になったお姫様を見て、王子様は落胆しました。

しかし、それでもお姫様のことは、嫌いにはなれませんでした。

むしろ前よりも、好きになったような気がします。

王子様はお姫様を喜んで送り、その途中で高級料理をご馳走しました。

お姫様がお城に籠っていた理由は、恥ずかしがりやなわけでもなく

人見知りなわけでもなかったのです。

その男勝りな性格のせいで、イメージダウンしないように家族の者が、外に出るのを、人に会うのを禁止していたのです。

イベントがあるときは、一言も喋らないようにして

なんとか工夫を凝らし、その性格がばれないようにしていました。

そのおかげで、お姫様人気は今も健在です。

一方王子様は、お姫様の性格を知る数少ない他人としてお姫様と話す事を許されました。

王子様は、毎日のようにお姫様のお城へと通っています。

そのおかげで、少しお姫様にうざがられています。

それでも王子様は、満足でした。

王子様の気持ちは、まだお姫様には知られていません。

空は、雲ひとつない青空。

その下に広がるのは、大きな高等学校。

そこに通う高校三年生、たちはなすずか立花涼香は

ちょうど靴箱に靴を入れるところだった。

短い髪が、風に揺れる。

涼香は髪をかき分けながら、靴を脱いだ。

靴片手に、靴箱を開ける。

するとそこには、白い手紙が置いてあった。

それも何枚も。靴箱が、埋まるくらいに。

涼香は怪訝そうな顔をして、手紙を一枚手に取る。

靴を置いて、二つ折りにしてある手紙を開いた。

そして、涼香は顔を顰める。

そこに書いてあった言葉は

「好きです（笑）」

だった。

「・・・」

しばらく黙る。

次々と紙を手に取り、開いていくが

それらには全て同じことが書いてあった。

再度黙る。

涼香はいきなりその紙を破り、大声で叫んだ。

「・・・笑うなー！」

朝の学校に大きな声が響き渡った。

涼香は、勢いよく教室のドアを開ける。

色んな人から掛けられる「おはよう」を無視し

真っ直ぐに目標に向かって歩く。

髪を二つに分けて縛っている、少女の後ろに立つと肩を掴み、無理矢理こちらを向かせた。

「うわっ！」

少女は驚き、そのまま後ろを向かせられる。

「・・・あ」

そこにあつた顔を指さす。

「おお、涼香。おっはよー」

少女は笑顔で、朝のあいさつを述べる。

「おっはよー、じゃないわよ梨津！」

涼香は憤怒^{ふんど}の形相で、少女に詰め寄る。

梨津と呼ばれた少女は、

「何？朝から殺気立っちゃって」

「靴箱に手紙入れたでしょ」

梨津は少し考えてから、ああ、と思い出したように言った。

「あれね。どう？おもしろかったでしょ？」

「ぜんっぜん！っていうか、あんな手の込んだことわざわざやらないでくれる！？」

涼香は怒鳴る。

「え？だって涼香面白いし」

梨津は笑いながら言った。

その瞬間、涼香の中で何かがプチッと切れた。

梨津の肩から、すつと手を離す。

そして、腕を上上げて思い切り振りかぶる。

その握り締めた拳は、真っ直ぐに梨津の頭の上に向かつて、勢いよく下がっていく。

梨津はそれを見て、ひょいと横に体をずらした。

その所為で、涼香の拳はイスの背もたれの上のほうに、思い切り当たる。

「うっ！！」

呻き声があがる。

「あはは。馬鹿^{バカ}じゃん涼香」

梨津は声を出して笑った。

「くっ・・・くそっ！」

涼香は、赤くなつた手の側面を擦^{さす}りながら言った。

「朝から騒がしいね、涼香」

後ろから声がした。涼香は、もしかと思い

眉間に皺を寄せながら、後ろを向く。

「や、おはよう」

そこにいたのは、笑顔で笑っている少年だった。

「げえ・・・。出たな、三月亮介^{みつきりようすけ}」

「やだな、そんな怪物が出たみたいな言い方して」

亮介は、笑顔のまま涼香に近づいた。

「近寄るな、三月亮介」

涼香は後ろに一步下がった。

亮介も、一步前に出る。

「ていうかさ、なんでフルネーム？」

また一步下がる涼香。

「どうでもいいだろ、三月亮介」

亮介も、また一步前に出る。

「疲れない？フルネームって」

涼香と亮介は、ろくでもない会話を繰り返しながら
どんどん動いていく。

それを見た梨津は、亮介が前に出た瞬間に

涼香の背中を、思い切り押した。

「ぐわっ！」

変な声をあげ、涼香は前に倒れていく。

亮介は驚きながらも、腕を広げ涼香を
受け止めようとする。

涼香が亮介の胸に飛び込む――

その前に、足を踏ん張り亮介の目の前で止まった。

「・・・・・・・・」

亮介は、無表情で黙る。

「チッ」

梨津は悔しそうに、舌打ちをした。

「り、梨津この野郎！危なかったじゃん！」

涼香は梨津を睨んだ。

「素直じゃないなあ。そのまま、亮介の胸に飛び込んでいけばよかったのに」

「そうそう。素直じゃないな」

梨津に便乗して、亮介も涼香に抗議した。

「バカ！・・・とにかく、近づくな。三月亮介」

涼香は鋭い目付きで、亮介を睨んだ。

亮介は、やれやれというように肩をすくめた。

「ま、別にいいけど。嫌でも近くにいなきやいけないんだし」

亮介はにっと笑うと、自分の席へと戻っていった。

涼香は亮介の背中を、眉間に皺を寄せ睨んだ。

その時、授業の始めを告げるチャイムが鳴った。

「ほら、戻んなよ」

そして梨津はにいと笑う。

「亮介の隣に」

その瞬間、涼香は撃沈した。

教室に先生が入ってきて、席に着かざるをえなくなった。

亮介の、隣の席に。

授業中。涼香^{すずか}は、ふてくされた顔で
ぼーっと窓の外を眺めていた。

「ああ皮肉　なんて皮肉だ　ああ皮肉」

「何一句詠んでるの」

涼香の隣の席の亮介^{りょうすけ}は、シャーペンをくるくると
回しながら、涼香に突っ込む。

「ふん。お前には関係ねーよ」

涼香はつまらなそうな顔をして、イスの上で
胡坐^{あぐら}を掻いた^か。

「あのねえ。女の子が胡坐なんか掻いちゃいけません」

涼香は、鼻をふんつとならした。

「俺の為にやめなさい」

「なんでお前の為に胡坐をやめなきゃいけないんですかー」

涼香は、亮介を横目で睨んだ。

「涼香」

名前を呼ばれる。

「ん？」

「回ってきたよ」

前の席の女子だった。涼香に手紙を渡す。

それは、ご丁寧にも封筒に入っていた。

「うわ。絶対梨津からだ」

顔を顰^{しか}め、涼香は封筒を開ける。

その中から出てきたのは

「・・・・・・・・」

封筒だった。

その封筒も開ける。その中身も、封筒。

「なんじゃこりゃ！馬鹿^{バカ}かあいつは！」

どんどん封筒を開けていく。それに従って次第に封筒のサイズも小さくなっていく。

「うわあ。めんどくさいことするね、梨津も」

それを見ていた亮介は、笑顔で言う。

一センチ四方の封筒を開けると、そこには二つ折りの小さな小さな紙が入っていた。

「や・・・やつと終わった」

小さな紙を開く。

そこに書いてある文字に、涼香は冷たい視線を投げ掛ける。小さな紙に小さな小さな文字で、書いてあったのは

『亮介と結婚しちやえ!』という言葉だった。

涼香が梨津のほうを向くと、梨津は涼香に笑いかけ親指を立てた拳を突き出した。

それを見て、涼香は梨津を睨みつける。

「何々？何て書いてあったの？」

興味津々の亮介を尻目に、涼香はその紙を破り捨てた。

「あーあ。見たかったのになあ・・・」

亮介は残念そうに呟いた。

午前の授業も終わり、午後に入入。

お弁当を食べ終わった涼香は、梨津と一緒に屋上にいた。

屋上には、二人以外は誰もいなかった。

二人は並んで座っていた。

相変わらずの晴天、青空。優雅に飛ぶ鳥の姿が見えた。

「ほんつと梨津ってさあ、器用っていうか馬鹿っていうか。面倒くさいこと好きだよなあ」

涼香は呆れた口調で言う。

「そうそう。涼香なんて亮介の前だと更に口悪くなるもんねえ」
梨津はうんうんと頷きながら答える。

「人の話聞いてた？」

涼香は、梨津を睨む。梨津はハハハ、と笑った。

「ったく……。弁当教室に置いてくるわ。ちょっと待ってて」

「はいよー」

涼香は、弁当を持って立ち上がり屋上から出て行った。

涼香が丁度屋上で立ち上がった時、亮介は誰もいない教室の

窓辺で、黒板消しを両手に持ち掃除をしていた。

「まったく。なんで昼休みになると皆、いつも教室から出て行くんだ」

独り言をぶつぶつと呟きながら、両手に持った黒板消しを互いにぶつける。

亮介は、ふと顔を上げた。空が目に入る。

「あー……。清々しいほどの青空だ」

高らかに、鳥が飛んでいた。

そのとき、すっと手から黒板消しが落ちた。

「あ」

亮介は驚き、咄嗟に手を伸ばす。

その瞬間、運が悪いことに亮介の体は

窓の外へと消えていった。

沈黙が生まれる。教室の中には、誰もいなくなった。

「……。あぶねー」

その時、一つの声が聞こえた。

亮介は、ぎりぎりで窓枠を掴んでいたのだ。身体能力高くてよかった、と亮介は思った。

しかし、教室には誰もいないので

助けを呼ぼうにも、誰も来てくれない。

「うーん……。どうしよう」

亮介は、危ない状況にも関わらず

落ち着いていた。いや、ぼーっとしていた。

「ああ・・・空が綺麗だ」

鳥は、相変わらず自由に飛んでいた。

そんなとき、涼香は教室へと向かって歩いていた。

亮介の手は、もう限界に達していた。

赤くなり、腕は震えていた。

「うーん。さすがにヤバイかな」

そんなときでも、亮介は落ち着いていた。

ふと、亮介は思い出す。

「そつえば、こんな場面物語にあつたなあ・・・」

しみじみと、亮介は思い出し始めた。

「確か、お姫様が崖でこんな状態になつて、王子様助けて、って

叫んだら、王子様が助けに来てくれるんだっけなあ」

その時、亮介の頭の中にある考えが浮かんだ。

一気に息を吸い込み、大声を出す。

「王子様ー。助けてー」

予想以上に、声は出ていなかった。

「・・・やっぱり駄目か」

亮介が、本気で諦めて落ちようかと思つたその時。

窓から、誰かの顔が現れた。

「う・・・わ！三月亮介、何やってんの」

涼香だった。亮介は驚き、啞然とした。

「ちよつと！と・・・とりあえず、助けてやる！」

涼香は亮介の手を掴み、力を入れると

「んぬー！」

と叫び、亮介を教室へと引きずりこんだ。

「す・・・すごい。本当に助けに来てくれた」

「ったく・・・」

亮介は、少し感動していた。

涼香は、弁当を置きに教室へと向かっていた。

教室に入ったところ、窓枠に手だけが見えていたので驚いて近づいたところ、亮介がぶらさがっていたということだった。それを聞いた亮介は、また感動していた。

「ていうか、なんであんたは窓にぶらさがってたの？」
聞こえているのか聞こえていないのか、亮介はぼーっと涼香を見詰めていた。

「・・・答えるよ！」

涼香は叫び、亮介を睨む。

「まあいいじゃん。とにかく、ありがとう」

亮介は涼香に近づき、額にキスをした。

そんなとき、梨津はあまりにも涼香が遅いので教室へと向かっているところだった。

教室のドアのところで止まる。

中では、亮介が涼香の額にキスをしているところだった。

「おお。いい雰囲気」

言った直後、涼香は立ち上がり亮介を殴っていた。

「・・・ありゃ」

梨津は、ため息をつき廊下の窓から、外を見た。

青空では、二羽の鳥が並んで飛んでいた。

午後の授業も、もう終わりに差し掛かっていた。
寝ている者も多く、教室はだらーんとした
空気に包まれていた。

「・・・ねえ」

亮介が涼香に話しかける。

返事はなし。

「まだ怒ってるの？」

これも返事なし。

それどころか、涼香は窓の外ばかりを見て
亮介のほうを見ようともしない。

「まったく。折角お礼してあげたのに」

傍^{はた}から見ると、亮介が独り言を言っているようだった。
まったく返事を返さない涼香を見て、亮介は
ため息をついた。

「あのさあ、何もそんなに怒んなくてもいいじゃん」

亮介は、はあ、と息を吐く。

「涼香だって赤くなってたのにね」

その言葉に、涼香は亮介を睨んだ。

「赤くなつてないわ!!」

涼香は叫ぶ。

「えー？でも俺しっかり見たよ」

「そ、それは・・・怒ってたからだ!」

苦し紛れの言い訳に、亮介はにやっと笑う。

「嘘。ホントは嬉しかったりして・・・ぐえっ」

「んなことあるかー!!」

涼香は亮介の首を絞める。

騒がしい二人に、クラス中が注目した。

それを見た梨津は

「早く付き合えないかなー」
と小さく呟いていた。

お姫様のような王子様の思いが

王子様のようなお姫様に届くのは

まだまだ遠いだろうと、王子様は思った。

それでも、お姫様は以外と鈍感だと

王子様は気がついたのだ。

ただ、今は楽しいからいいや。

マイペースな王子様は、微笑みながら思った。

「このやろー！」

お姫様は、相変わらず叫んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884b/>

逆転ボーイ アンド ガール

2010年11月28日22時36分発行